# ピッタインダウン

（おきあがりこぼし）

第44号

発行日　2024年1月5日
発行人　矢代　しイ
秋田市御野場7－1－29－305

## 大漁

まだらの鱗雲が光っている
小さな雲の塊は
少しずつかたちを変えながら
晩秋の海に浮かんでいる

雲の波路は果てしなく
空の魚は
海の記憶を取りもどすかのように
澄んだ秋を泳いでいる

飛行機雲は
柔肌を引っ掻いたような航跡を残して
どこまでも走っていく

夕陽に染まる雲の波に乗って
幾千のイワシやサバが群れをなす
明日は大漁！

## ふうふみろ

２２３６メートルは
鳥海山の最高峰新山
いつかはと胸に折り畳んできた

八月六日の早朝
目前には重量感ある新山
快晴が黒い山容を際だたせる

ごつい新山に勝負を挑む
岩の窪みを手探りで掴み
足場を確保
一気に身体を持ち上げる
景色を見る余裕はなく
眼に映るのは立ちはだかる岩のみ

累積した岩は

わたしのケルン
２２３６（ふうふみろ）
ふ　う　ふ　み　ろ
心のなかで積み上げる

ペンキの目印に従って登る
切り立つ巨岩の
黒い静けさに息を呑む
胎内潜（くぐ）りの大亀裂の底を通り岩峰へ

頂上！
一気に視界が開け
見渡す限りのゼニスブルーの空
はるか遠くには薄紫色の影鳥海

御来光は
迷いなき
ダイヤモンド

歓喜に叫ぶと
山彦が応えた
ふうふみろ

## 君に逢いたい

八月五日
逢いたくて待ちこがれた
君に逢いに行く
九時五分、鉾立登山口を出発
鳥海山山頂を目指す
超のんびりの親子登山

空は真っ青な鳥海ブルー
心が朗らかに澄みわたる
鈍行登山は景色を新たにする
犬の字に似た雲
見えないが感じる風の手
ニッコウキスゲの橙黄色
飛び交う蜻蛉は赤の水平飛行
しかし

道のりは長く
繰り返されるアップダウンの道
厳しい暑さとリュックの重量
期待と不安が交錯する
ひたすら自分との闘いだ
君に逢うまでは！

一二時四分、御浜に到着
登山客で賑わっている
扇子森、御田ヶ原、八丁坂と
火山礫の道をたどる
粗い山膚は
険しく厳しく容赦ない

分岐点の七五三掛で千蛇谷コースを取る
山肌に組まれた丸太の階段が怖い！
高度を増すごとに
体力と気力が汗とともに
大地に消えてゆく

〈もうすぐだよ〉の声に
魂が甦生する
四時四三分、御本社に到着
七・一㎞、七時間三八分の山行
今夜は山小屋泊
まもなく君と逢える！

辺りが暗くなった
あっ、星！
藍色の空に君は姿を現した
逢いたかった！
君が微笑むと
仲間もおもむろに顔を出し
一斉に瞬く
光る輪郭の黄色い瞳
七年ぶりの再会だ
逢えた喜びに心が躍る

突如
和む空間に
すさまじい勢いでガスが出てきた
天空に暗幕が下ろされ
星たちが
一瞬にして夜のなかへ消えてゆく
ほどなくして幕が開き
舞台の袖から
星たちが再び煌めきだした
何幕もつづく星のショー
幕が閉じるまで
今宵は舞台を楽しもう！
明るく光る
君たちの姿を眼裏に焼きつける

七〇も過ぎ
もう君のもとへは来れないだろうから——

## 冬の樹

雪山の向こうで誰かが呼んでいる
高い壁に木霊して聞こえてくる声は
割れてはっきりしないが
孤独な山小屋の
ランタンのような明るさがある

声に誘われて雪原を渡ると
山は眠っているような静けさ
頂上は硬い雪に満ちて
凛々しい姿
雪山の向こうから声が聞こえてくる

どんよりした空の下
色彩のない景色に点在する樹々
シナノキがひどく荒れている
冬の厳しさに抗しえない

樹の痛み――

白い山の向こうで誰かが呼んでいる
途切れながら聞こえてくる声は
低くてよく分からないが
繊細な風にそよぐ
木の葉のような素直さがある

白い海をずっと行くと
海原がきらめき揺れている
まばゆさは
ダイヤ色
清冽な幻想の花が咲く

近くで奇妙な音がする
鋭く打ちこむ竹刀のような
暴れ馬を鎮める手綱のような
生木を切り裂く斧のような
張りつめた音が聞こえてくる

ビシッ！
雪の底に埋もれた枝々が
厚く固い膜を突き破り
立ち上がる
力強い意志

根方の雪に光が流れこみ
丸い輪のなかから
微かな土の匂いが立ちのぼってくる
そこだけは
春の花園

霧氷も融けて
枝先には
透明な真珠
誰かの声が聞こえてくる
あしたの方から

## 死

（あのヒト　死ぬよ

母の表情が
瞬時に強張った

わたしには
亡くなるヒトが見えた
五歳のとき
母と歩いていて
（ここの家のヒト死ぬよ
つぎはこの家の……

ほどなくして
指さした家の
玄関先に忌中の札が並んだ
（この子は……

母はそれ以上は言わなかった

大人になってからも
死を直観的に知ることがある
適中したときのやるせなさ

七十を過ぎ
八十路の切り岸
いのちの落日がおぼろに映る

人はいつか死ぬ
怖くはない
思うのは
なにを残していけるのか
ということ

手渡したい
後悔しない生きざまを
人生を創作した気概を

娘へ

（ワタシ　死ぬよ

## 徒然のエチュード　41

①

瞳孔検査の帰り
まぶしすぎる！
目が変だ

帰宅後
鏡を見たら
左の瞳は満月
右の瞳はゴマ粒

これじゃ～
うかうか歩けない！

長いつけ睫毛で遮光
大丈夫だ～

②

はじめて
手にふれたときの
触感が忘れられない

器用そうな指
丁度よい肉付き
ぬくもりのある掌

さわり心地は
今までにない
手ざわり
なめらかなビロードのよう

忘れられない手を
ググッと引きよせる
淑女の手！

わたしも淑女になれますように

③
突然
スマホの画面に
あなたの寿命は
83歳
と表示
よくよく見ると
寿命タイマー
あなたの死亡予定日を教えます
あなたの寿命は
83歳
平均年齢＋3歳
あなたの余命はあと21170日です

このタイマー狂ってない？
AIを使ったら――

④
いま大掃除してるんだ～
どこ？
頭の中！

⑤
冬山で雪焼け
夏山で日焼け
いまでは
すっかり真っ黒けっけの
山女

# あけましておめでとうございます

皆様のご健康とご多幸を
心からお祈り申し上げます
素敵な一年でありますように

二〇二四年の「ピッタインダウン」は
第44号からのスタート。
本年もどうぞよろしくお願い申し
上げます。

## 【あとがき】

〈一年の計は元旦にあり〉というが、毎年大晦日の夜に新年の目標（三つ）を立て、日記帳の一ページ目に書き記す。ここ十年ほどは、最初に健康に関することを書いている。後の二つは必ずやりたいこと、一年をかけてやり切りたいことなどである。

十一月に日記帳を買い求めた辺りから、来年はどんな年にしたいのかを考え始める。自分が歩む一年を大いに楽しむためのルーティンでもある。

除夜の鐘を聞きながら、真っ新な気持ちで新年を迎える——。

＊

今年は辰年。上昇気流に乗り、心も暮らしも落ち着き、何より争いが収まりますように。新しい年が歩き出した。日々を大切にしたい。